

柳宗悦と沖縄文化

——周縁における民芸運動——

並 松 信 久

要 旨

柳宗悦（以下は柳）は河井寛次郎や濱田庄司らとともに「民芸運動」を展開したことで著名である。その民芸運動の一環として柳は、戦前の日本人では珍しく、沖縄、アイヌ、台湾の文化に強い関心をもった。これらの地域は日本の「周縁」に位置付けられ、近代化が遅れているという理由で、低い評価しか与えられていなかったからである。柳は沖縄文化に着目し、その周縁の文化の豊かさに気づき、それらは日本の将来にとって重要なものであると説く。

柳と沖縄文化に関する先行研究では、民芸運動において、柳による沖縄への関心がどのような意味をもったのか、そして沖縄のほうは民芸運動をどのように受け止めたのかは明らかになっていない。本稿では、戦時体制によって極端な集中化・画一化が進んでいくなかで、日本の周縁に注目する民芸運動は大きな変容を遂げ、そして沖縄という周縁の地域振興には有効ではなかったことを明らかにした。

この根本的な要因は2点ある。1点目は沖縄の文化的な「個性」を重視した柳が、その個性は何に由来するのか明確に語っていない点である。これは柳が歴史性を重視していないことに由来する。2点目は民芸の担い手である「民衆」のとらえ方である。柳における民衆は、本来は実存しない理念的概念であったが、それをそのまま実在の民衆に当てはめようとした点に問題があった。

キーワード：柳宗悦、沖縄、民芸、周縁、個性

1 はじめに

柳宗悦（1889–1961、以下は柳）は、バーナード・リーチ（Bernard Howell Leach, 1887–1979）らとともに「民芸」¹⁾の普及に貢献し、富本憲吉（1886–1963）や濱田庄司（1894–1978、以下は濱田）らと「民芸運動」を展開したことで著名である。その民芸運動の一環として、柳は戦前の日本人（民俗学者や言語学者を除く）では珍しく、沖縄、アイヌ、台湾の文化に強い関心をもった。これらの地域は帝国日本の「周縁」に位置し、近代化が遅れているという理由で、低い評価しか与えられていなかったからである。柳は「大体日本の工芸、風俗、生活、信仰等でよく伝統の残つてゐるのは北の國々、青森、岩手、秋田、山形等であるが、かゝる北端と南端の琉球とに、純日本が一番よく残存してゐることは特に注意されていゝ事柄であろう」²⁾と語り、周縁部に日本の民俗文化が残っているとす。柳は沖縄の民芸に着目し、周縁の文化の豊かさに気づき、それらは日本の将来にとって重要なものであると説く。柳の関心は民芸にとどまることなく、方言などにも関心を寄せ、広く沖縄文化全般に及んでいった。

柳が沖縄に関心をもったきっかけは、学習院中等学科の同級生に、琉球最後の国王尚泰^{しょうたい} (1843-1901) の孫である尚昌^{しょうしょう} (1888-1923) がいたことに始まる。高等学科時代には、すでに紅型^{びんがた}に目をとめ、さらに焼き物にも関心をもった。柳は沖縄行きまで考えていたようであるが、尚昌のイギリス留学、それに続く1923(大正12)年の尚昌の死去によって、立ち消えとなった。柳が沖縄の地を初めて踏むのは、1938(昭和13)年になってからであった。柳が大正末期に民芸運動を開始してからでも、すでに10年以上が経過していた。間隔が空いているので、関心の対象も変わり、学生時代には美術工芸品であったが、実際に沖縄を訪問した時には、民芸などをはじめとする沖縄文化であった。

柳が沖縄を初めて訪れた1930年代後半の民芸運動は、雑誌『工藝』の発行を軌道に乗せ、日本民藝館(1936年開館)でも次々と意欲的な展観を実施していた。しかしその一方で、日本民藝協会(1934年発足)と日本民藝館における運営や人事に関する問題が続いていた。そのために1938(昭和13)年頃には、柳の創作活動が大きく制約を受ける事態となっていた。柳自身が民芸運動の責任者から身を引きたいと漏らしたこともあった³⁾。このような状況のなかで、柳は初めて沖縄を訪れることになった。すなわち沖縄訪問時は、表面的には民芸運動は興隆期にあったものの、柳自身は「沈滞」と感じていた時期であった。

柳の最初の沖縄訪問以後に、民芸運動では新たな動きがある。それは大きく二つあった。一つは日本民藝協会同人の集団での沖縄行きが企画されたことである。これは「協团的移動制作」の試みと称された⁴⁾。もう一つは1939(昭和14)年に機関誌『民藝』が発刊されたことである。これは、すでに柳の編集で発行していた『工藝』誌(編集・造本に凝った雑誌であった)とは異なり、地方文化により一層目を向けていこうとするものであった。柳の沖縄訪問は、柳にとっても民芸運動にとっても、大きな転機になった。

ところで、柳と沖縄の民芸との関連については、すでに数多くの研究成果が発表されている。資料としてまずあげなければならないのは、柳自身の沖縄に関する論稿を集めた著書(柳宗悦『柳宗悦全集著作篇第十五巻』、筑摩書房、1981年)である。そして柳と沖縄文化との関連を分析した先行研究には、発表年代順に列举すると、渡名喜明「柳宗悦の沖縄文化論」(『沖縄県立博物館紀要』、創刊号、1975年、19～28ページ)；八田善穂「柳宗悦の民芸論(IV) 沖縄方言論争」(『徳山大学論叢』、第23号、1985年、93～118ページ)；西原文雄「昭和十年代の沖縄における文化統制」(西原文雄『沖縄近代経済史の方法』、ひるぎ社、1991年、297～320ページ)；太田好信「文化の流用(Appropriation)、あるいは発生の物語へむけて—柳宗悦と論争の〈場〉としての言語」(『北海道東海大学紀要 人文社会科学系』、第5号、1992年、77～98ページ)；坂元昌樹「柳宗悦と保田與重郎—〈民芸〉・〈民衆〉・〈沖縄〉」(『近代文学研究』、第16号、1998年、57～69ページ)；竹中均「方法としての幻視—柳宗悦の沖縄—『民藝叢書』がえがく社会イメージ」(竹中均『柳宗悦・民藝・社会理論—カルチュラル・スタディーズの試み』、明石書店、1999年、117～38ページ)；戸邊秀明「民芸運動の沖縄—「方言論争」再考に向け

てのノート」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』, 第4分冊48号, 2002年, 31～43ページ); 佐藤洋子「柳宗悦の思想形成と民芸運動」(『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』, 第15号, 2002年, 43～61ページ); 久貝典子「日本民藝協会同人の沖縄調査一昭和13年～15年にかけて」(『沖縄芸術の科学: 沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』, 第22号, 2010年, 21～63ページ); 与那原恵『首里城への坂道一鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』, 筑摩書房, 2013年, などがある。多くは主に「沖縄方言論争」を取り上げ, 柳らの民芸運動がどのように変容していったのか, あるいはどのような影響を与えたのかという点に焦点があてられている。

これらの研究成果では, 沖縄文化に対する柳や民芸運動の動向が詳細に分析されている。しかし前述のように, 柳が沖縄に眼を向けたことが, 民芸運動の転機となっているにもかかわらず, 沖縄において民芸運動がどのように受け止められたのかは明らかになっていない。戦時体制によって極端な集中化・画一化が進んでいくなかで, 日本の周縁に注目する民芸運動自体のほうが, 活発なものでなくなっていくことは十分予想できる。しかし実際はその逆で, 民芸運動は政府による地方振興策の一環として活動を続けた。実際の動向からすれば, 沖縄を対象とする民芸運動そのものに大きな問題点があったことになる。この点を明らかにするには, 昭和初期という時代状況のなかで, 民芸をはじめとする沖縄文化が, 柳によってどのような位置付けがなされたのかを明らかにしなければならない。柳は伝統的な芸術, さらに言語に至るまで, 沖縄の文化的な「個性」を重視した。しかしその個性は何に由来するのか, 柳自身は明確に語っていない。個性はとりもなおさず歴史性に依拠すると考えられるが, 柳はそれをどのように考えていたのかが問題なのである⁵⁾。

さらに民芸という用語の由来が「民衆的工芸」であるならば, 沖縄の場合の「民衆」とは何を意味するのも問題にしなければならない。なぜなら柳における民衆は, 本来は実存しない理念的概念であったからである⁶⁾。しかし柳はそれをそのまま日本の農村部や沖縄などの周縁における実在の民衆にあてはめていった。したがって実在の民衆があたかも理念的民衆であるかのように語られることも多い。このことが柳の議論に少なからず混乱をもたらしていると考えられる。

地方文化の重視を説いて, それに関連する活動を展開した柳にとって, 沖縄という周縁の文化がどのような意味をもっていたのかを考えることは, 歴史上の問題というだけでない。現在まさに重要となっている課題ともいえる。近代日本では, 幾度となく地方振興が叫ばれてきた。おおかたは国家の「財政難」と地方の「人口減」が発端となっているが, 未だ有効な方策が見出されていない。この点で柳らが主導した民芸運動のもった意味を考えることは, 現代日本の喫緊の課題に応えることであるといえる。以下では柳の事績をたどる形で考察していくことにする。民芸という用語の誕生と民芸運動の発端からはじめ, 次に琉球ブームの高まりと柳らの沖縄訪問, そして沖縄訪問時に起こった方言論争の顛末, 民芸の背景となる文化をめぐる議論の順に考察していく。

なお本稿の引用文中には、不適切な表現が含まれている部分があるが、史実であることを重視して、あえて訂正を加えていない。また引用文中には読みやすくするために、句読点を一部加えた箇所がある。また各人物の生没年については、わかる範囲で記している。

2 民芸の誕生

柳は近代西洋文明が世界を席卷するなかで、東洋や日本はその勢いにのみ込まれることなく、独自の存在意義を保ち続けることができるのかという問題に強い関心をもっていた。その問題に取り組む過程で、日本文化の個性を発揮できるものとして、「民芸」を強調することになる⁷⁾。民芸という用語は造語であるが、それは1925（大正14）年12月末の柳、河井寛次郎（1890–1966、以下は河井）、濱田の3名による紀州旅行の際に、三重県の津へ赴く途上の車中における議論から生み出された。柳は、

「民」はもとより民衆の民で、「藝」は私共の意味では「工藝」の藝を指したのであります。それ故「民衆の工藝」の略称として「民藝」の二字を選んだわけであります。「民衆藝術」の意味でもよいのでありますが、藝術と申しますと、とかく高級な個人的美術などを連想致しますので、もっと名もない工人達が作る実用的工藝品である意味を示唆したく（中略）。それで之を英訳致します場合も‘Folk Art’といふ言葉を避け、‘Folk Craft’といふ言葉を用ゐることに致しました。この英語の表現も実は私共の造語であります⁸⁾。

と説明する。民芸は貴族的な工芸美術に対する民衆的工芸を略した用語であるという。市などで売られている古着・焼き物・金物・塗物・木工品などが「下手物」とよばれ、柳らはその下手物という言葉のもつ面白味や自由素朴さに親しみを覚え、民芸という新しい用語をつくった⁹⁾。その理由は主に二つある¹⁰⁾。一つは、下手物は俗語であるが故に、誤用転用されやすく、実際にこの言葉が広まるにつれて誤用され、一般的に捨てられ嫌われ顧みられなくなる物と解されるようになったからである。もう一つは、柳らが惹かれる下手物の魅力を、正確に知ってもらうために、新しい用語を生み出して概念を明瞭にしようとしたためである。

従来まで下手物とよばれていたという工芸品を、民芸と名付けてから、柳が「芸術」という用語を用いることは激減する。かつて「朝鮮の美術（芸術）」とよばれていた朝鮮陶磁は、「朝鮮の工芸（民芸）」という用語に置き換えられる¹¹⁾。さらに新しい「民芸」概念を主体とする工芸論においては、「美術」を工芸の対比概念として用いる事例が現われるようになる。柳は後に民芸品を求めて、日本の多くの地域を旅することになるが、最もいきいきと今なお優れた民芸品をつくっているのは、日本のなかで最も貧しいとされる東北と沖縄であると語る。柳は沖縄に民芸の典型的な事例を見出したようであった。

柳が沖縄に関心をもったのは、前述のように尚昌との出会いであった。しかし関心をもち続けることができたのは、濱田の存在が大きく、濱田によってもたらされた沖縄の現地情報に依るところが大きかった¹²⁾。民芸という用語の誕生以前であるが、濱田は東京高等工業学校窯業科（現・東京工業大学）を卒業後の1916（大正5）年に、河井の居た京都の市立陶磁器試験場に入った¹³⁾。そして1918（大正7）年に濱田は、河井に誘われて沖縄を旅している。柳が沖縄を訪れるはるか以前であった。濱田は、琉球陶器の一大生産地である壺屋（那覇）を訪れている。濱田は壺屋の民俗文化、そこで営まれる陶技、集団の作業、制作された「やむちん」（焼き物）に感嘆した¹⁴⁾。濱田の晩年の著書『無盡蔵』（朝日新聞社、1974年）に当時の感懐をくわしく記述している。濱田は、

私達は細工場に立ち入り、縁側に腰かけ、台所を覗き、女達の候う文体の会話を耳にして、裏も表もないありのままの暮しに強くうたれた。京都の陶家のように技法を隠して護ろうとする匂いは少しもない。蹴轆轤けろくろでの形作りでも、釉の合わせ方でも何という爽やかさで片付けられているのだろうかと思ましかった。（中略）幸いなことに壺屋の人達はみな仕事好きだ。指図を待たず実によく働く。子供達まで小学校帰りの一群が、そのうちの誰かの仕事場へ入ってきて、鞆を投げだしたまま頼まれもしないのに年嵩の者が輪郭を彫ると、次のものが細部を足し、一番幼いのが絵を浮かすために余分の土を取りさる。見ていて私はほほえましかった。仕事の根になる暮しが、私達とは較べものにならないほど強く生きているのを想わせる。技術の上で受けついで伝統は、形の奥の見えないところで深く守られ、たとえば器に絵付をしてなおよくなるということは、私達にとってはなかなか難かしく、気の重いことだが、壺屋の陶工達にはいつもくたくなく行なわれていて、どれも嬉しい。それだけに自分で作品の結果を選ぶことが不得手だが、解らないでいい仕事をしていることはどんなに素晴らしいことか。私達はとうにこういう無意識の創作力を失って久しくなるので羨ましい限りだ¹⁵⁾。

と記している。琉球王国時代以来、琉球陶器は繊細なものであり、その技法は民芸の範ちゅうに入れるには、むしろ違和感のあるものであった。濱田が目にした壺屋の陶工も、単に素朴さをかたちに行っているのではなく、明らかに「美」への探求心をもった工人（職人）であった。

壺屋は17世紀末に、琉球国内の各地にあった窯場を、琉球王府が統合して操業を始めた所である¹⁶⁾。それ以前の琉球窯業史をたどれば、1616年に薩摩から招聘した3名の朝鮮人陶工による技術指導が「涌田窯」（那覇）で行なわれたのが、大きな変革とされる。文禄・慶長の役（1592～1598年）の時に、薩摩の島津義弘が朝鮮人の陶工数十名を連れ帰り、「薩摩焼」が生み出された。琉球にやってきた朝鮮人の陶工は、この流れをくんでいる。その後、琉球人の陶工が薩摩や中国に留学して技法を磨き、さらには東南アジア諸国の技法も採り入れていく。

窯場には湧田窯のほか知花窯（沖縄市）、宝口窯（首里）などがあり、壺屋はこれらを統合し、その後18世紀中期頃になって「登り窯」（連房式の窯）の技術が伝えられた。この一方で、琉球王府は絵画や染織と同様、陶器の作家の保護育成を図っていたが、壺屋では上層を対象とした「高級品」を生産したわけではなく、幅広い層に向けた陶器を生産していた¹⁷⁾。壺屋の陶工は琉球国内で消費される一般的な雑器を生産し、碗や鉢、水甕、保存用壺などが大量に生産された。その傍らで士族層や富裕層向けの焼き物、さらに宗教儀式に用いられる祭具や酒器もつくられていた。琉球王国の崩壊後も、壺屋は陶器生産地として存続していた。

壺屋に感嘆した濱田は、その後1920（大正9）年に渡英し、セント・アイヴスで作陶に携わるが、関東大震災の報に接して、1924（大正13）年に帰国する。京都の河井と再会して、河井と柳とを引き合わせている。その年末には早速、再び壺屋へ行き、翌25（大正14）年3月まで滞在して制作を行なっている。この時期に、琉球芸術の研究者で染色家の鎌倉芳太郎（1898-1983、以下は鎌倉、1973年に「型絵染」の保持者として人間国宝）が濱田を訪ね、琉球陶器などについて語り合っている¹⁸⁾。鎌倉は当時、琉球陶器などの調査を行なっていた。鎌倉は後年、回顧して、

柳氏が人間の生活と自然の関連において、文化発祥の原点に立ち、日常雑器にまで用の美のあることを説いたのは正しい。（中略）（柳らは）伝統技法にもとづく工芸を上手物といい、貴族的芸術として否定的立場をとっている。（中略）琉球王国時代、染織工芸をふくめて、諸工芸は王国の一国統制経済体制下に計画的な産業企画の下に生産されたものである。この点から見ても、これはまったく柳氏説くところの民芸ではない¹⁹⁾。

と断じている。柳らによる「下手物尊重の民芸の影響」が、沖縄の染織品、漆工芸などの「巧妙精緻な技法」の衰退を招いた一因であると批判している。沖縄の工芸品は日常生活に使われるものであったが、それは一方で芸術性の高いものでもあった。鎌倉は一貫して民芸運動に冷やかな態度をもち続けていたが、沖縄の工芸に対して民芸運動がどのような意味をもったのかを鋭く指摘している。

話は前後するが、1925（大正14）年の年末に、前述のように民芸という用語が生まれる。その翌26（昭和元）年には、柳は「日本民藝美術館設立趣意書」²⁰⁾を発表して、民芸運動が本格的に始まる。この年の秋から翌年の春にかけて、濱田は再び壺屋で作陶を行なっている。濱田が幾度か足を運んでいる壺屋に関する報告が、柳の沖縄への関心呼び覚ました。この点で民芸運動の発足は、沖縄文化が大いに関わったといえる。しかし実際に柳が沖縄を訪れるのは、濱田の報告から10余年後の1938（昭和13）年になる。沖縄文化に関心をもった柳田国男（1875-1962、以下は柳田）と折口信夫（1887-1953）が1921（大正10）年に、さらに渋沢敬三（1896-1963）が1926（大正15）年に沖縄を訪れていることからみても、柳の沖縄訪問が著し

く遅いことがわかる。

3 琉球ブームの起こり

1934（昭和9）年に民芸運動の全国的組織である「日本民藝協会」（以下は民藝協会）が設立された。柳はこの民藝協会の同人らとともに1938（昭和13）年から1940（昭和15）年にかけて、4回にわたって沖縄を訪問する。沖縄では主に民芸品の調査・蒐集、史跡・文化財の視察、芸能鑑賞などを行なっている。これらの活動を通して、柳をはじめとして民藝協会同人らは「琉球文化」全般をとらえて、本土に紹介したという自負をもっていた。しかしながら琉球文化に関する紹介は、これが初めてではない。柳らが沖縄を訪問する以前から、多くの芸術家や研究者らによって琉球文化に関する調査研究は進められていた。さらにその成果は、出版物をはじめとして展覧会・講演会・ラジオ放送・芸能公演などを通じて広く知られていた²¹⁾。

1925（大正14）年9月に東京美術学校で開催された「琉球芸術展覧会」（啓明会主催）において、多数の工芸品が展示され、鎌倉らによる講演も実施された²²⁾。これが琉球芸術を大々的な規模で紹介する日本最初の機会となった。展示品は鎌倉の蒐集品のほかに、首里の中城御殿の美術品や工芸品が東京に運ばれている。後に沖縄戦によって中城御殿は焼失し、所蔵品が失われてしまったので、展覧会出品用に東京の尚家に運ばれ保管された所蔵品は、結果的に、かろうじて焼失を免れて現存することになる。出品点数は約3千点で、風俗・宗教・建造物・工芸品・生物などを、テーマ別に16室において展示された。講演会のほうは3日間にわたって開催され、演題と講演者は、「琉球史概観」（東恩納寛惇，1882-1963，以下は東恩納）、「南島研究の現状」（柳田）、「古琉球の歌謡に就きて」（伊波普猷，1876-1947，以下は伊波）、「琉球美術工芸に就きて」（鎌倉）、「琉球芸術の性質」（伊東忠太，1867-1954）、「琉球の音楽に就きて」（山内盛彬^{せいひん}，1890-1986）などであった。当時における沖縄文化研究の最高レベルの講演者が集ったといえる²³⁾。

講演会において鎌倉は、「絵画、彫刻に、或は漆工、陶磁工、染工、刺繍工、金石工に、一糸乱れぬ調和があって、互いに其の美を發揮しているようでございます。この美しさこそ、琉球王国が醸した永き歴史の精華であろうと、憶うのであります」と述べている。鎌倉による講演は琉球工芸の全体像を、東京という中央において初めて紹介したものであった²⁴⁾。琉球芸術展覧会は大きな反響を得て幕を閉じる。主催した啓明会はこれを受けて、琉球芸術調査の続行のために、1925（大正14）年9月に鎌倉に対して、2千円の研究補助金を支給することを決定している。

1928（昭和3）年に啓明会は再び展覧会を開き、鎌倉は「琉球染色に就きて」と題して、^{びんがた}紅型についての講演を行なっている。この頃から東京都内の百貨店などで紅型や琉球陶器の展覧会

が、ひんぱんに開催されるようになる。同年1月には東京銀座松屋呉服店、4月には京都四条大丸呉服店で「紅型展覧会」が開催された。この展覧会に出品された紅型を収載した『紅型：古琉球』（山村耕花編・岡田三郎助校、巧芸社、1928年）も刊行され、それは伊波が解説を書いている。伊波は1921（大正10）年の柳田の沖縄訪問以来、柳田の学問的方法に深く関わるようになっていた。伊波は1924（大正13）年に県立図書館長の職を辞し、翌25（大正14）年に校訂作業を終えた『おもろさうし』を携えて上京している。伊波は柳田からオモロ研究を促されて、1947（昭和22）年の死去まで東京にとどまり、研究生活を続けている。伊波は『紅型：古琉球』の解説を書いた後、方言をはじめ沖縄の歴史と文化に関連する数多くの著作を発表している²⁵⁾。

東京をはじめ都市部において、沖縄の紅型が広く知られるようになるのは、何といても百貨店の果たした役割が大きい。当時の百貨店は新しいライフスタイルを提案し、さまざまな流行を作り出し、文化事業を企画して消費者の関心を引きつけていた²⁶⁾。とくに服飾に関しては、流行の発信源ともいえる存在であった。当時は和服が主流であったので、和服柄の新しいデザインを募集して商品化し、日本画家や文化人がその審査員をつとめていた。そのなかで紅型は多くの注目を集めた。百貨店では1929（昭和4）年10月に「琉球美術工芸品展覧会」（上野松坂屋）、1930（昭和5）年1月に「琉球展覧会」（日本橋三越）、同年11月に「琉球古今美術工芸品展覧会」（上野松坂屋）など、琉球工芸全般を紹介する展覧会が相次いで開催された²⁷⁾。なかでも日本橋三越の展覧会は規模が大きく、東京美術学校で開催された琉球芸術展覧会の形式がそのまま踏襲され、東恩納による「琉球の歴史と地理に就て」と鎌倉による「琉球文化に就て」という講演会の実施や、琉球民謡と舞踊の公演も行なわれている。

百貨店における展覧会以外では、紅型の書籍が話題を集め、東京などで琉球芸能の公演が相次いで催され、それがラジオで放送されている。沖縄芸能も脚光を浴び始め、1928（昭和3）年4月には、柳田によって企画された「第三回郷土舞踊大会 八重山公演」（明治神宮外苑の日本青年館で開催）が行なわれた。日本青年館は1925（大正14）年に開館し、「郷土舞踊及芸能」公演を継続して行なっていたが、それは同館顧問の柳田の意向によるところが大きかった²⁸⁾。第三回郷土舞踊大会では八重山から多数の演者が上京し、公演翌日には、本格放送が始まって間もない東京中央放送局のスタジオで民謡などを披露し、それが放送されている。その後も琉球芸能の公演は続き、折口らの「民俗芸術の会」主催によって、1931（昭和6）年に「琉球舞踊・古典公演会」（日本青年館）が行なわれ、さらに1936（昭和11）年に日本民俗協会（昭和7年設立）の主催で「琉球古典芸能大会」（日本青年館）、そして翌37（昭和12）年に「琉球古典舞踊と講演の夕」（電気倶楽部）などが行なわれた。

このように大正末から昭和初頭にかけて、都市部を中心に「琉球ブーム」が起こった。この時期に紅型に衝撃を受けて染色家を志した芹沢銈介（1895-1984、以下は芹沢、1956年に「型絵染」の保持者として人間国宝）は、1927（昭和2）年に柳と知り合い、その後交流を続けて

いる。芹沢は民芸運動に参加し、各地の工芸品の調査・指導にあたることになる。芹沢らが参加した柳らを中心とする民芸運動は、昭和10年代に琉球ブームを巻き起こすことになる。しかし大正末から昭和初頭にかけての琉球ブームと昭和10年代の琉球ブームとは、様相が異なっていた。前者を第1次ブーム、後者を第2次ブームとすれば、第1次は啓明会や百貨店といった大きな組織に支えられたものであった。しかもラジオなどの新しい情報媒体の勃興期にあたり、東京が情報発信の中心となった²⁹⁾。これに対して、第2次のほうは民藝協会という中心的な組織があったとはいえ、第1次ほど大きな組織に支えられたものではなかった。情報媒体はもっぱら刊行物に依拠し、情報発信は柳らの知名度に負うところが大きかった。

第2次ブームの中心的な存在となった民藝協会が発行する出版物は、洗練された文章とデザインで作成されたものであった。さらに民藝協会は第1次ブームと同様に展覧会の開催をし、そのうえ映画（「琉球の民藝」「琉球の風物」など）制作などにも携わった。これらの多くは、もちろん「民衆的工芸」を発掘するという趣旨であり、第1次ブームとは異なる視点で沖縄文化を眺めようとするものであった。しかし実際は、どちらかというところ「貴族的趣味」を感じさせるものとなっていた。第2次ブームは民芸運動の一環であるとされるが、実際は柳がもつハイソサエティな雰囲気と知名度に便乗したブームであった。そして沖縄県は、第1次ブームが直接的に地元の振興に結びついたわけではなかったため、この柳の沖縄訪問を最大限に利用してブームを起し、地域振興のきっかけにしようとした。

4 柳宗悦の沖縄訪問

柳は1935（昭和10）年1月に『工藝』誌に琉球の染織を紹介している。また1937（昭和12）年7月には新宿伊勢丹で開催された展覧会において、紅型など沖縄の工芸品に強い関心を示し、翌38（昭和13）年1月に日本民藝館において「琉球染織特別展」を開催している。そしてほぼ同時期に柳は、初めて沖縄を訪問する（1938年12月27日～1939年1月13日）。同行者は濱田と河井であった。沖縄県の学務部長として赴任した山口泉（以下は山口）の招聘によるものであった。山口はかねてより柳の民芸運動に関心をもち、戦後の1948（昭和23）年には東京荻窪に「いづみ工芸店」（芸術家・写真家・デザイナーなどが集い、文化交流の場となる）を開いたほどであった。最初の沖縄訪問時は、前述のように、柳自身は「沈滞」と感じている時期であった。山口の招聘は予期せぬものであったようであり、柳は「急に琉球に行く事になった」と述べている³⁰⁾。しかしながら柳は沖縄訪問によって、沈滞した気分が晴れたようで、沖縄を「工芸の天国の様な所」と絶賛している。柳は沖縄に「現世の美の浄土」を見出したとまで述べる³¹⁾。一方、山口のほうは柳の沖縄訪問によって、地元発信の琉球ブームに火が付くことを期待した³²⁾。とくに沖縄の「観光」と「工芸」の振興に期待をかけ、柳の知名度はそれに大いに役立つと考えたようであった。

柳は約3週間にわたって滞在して、沖縄の工芸品、とくに紅型や緋、壺屋の陶器、獅子などシーサーに感銘を受ける³³⁾。柳のいわく多種多様な「琉球の富」に触れ、多くの工芸品を蒐集した。柳にとって見るもの聞くもの何もかもが新しく、とくに那覇の古着市は、財布が空になるのも忘れて買い漁ったという。安い価格で古着を手に入れたことについて「今から思うとよくもこの「黄金時代」に廻り会ったものである。しかし更に二、三十年も前だったらそれこそ「金剛時代」であったであろう³⁴⁾と素直に喜びを表現している。

滞在中には、民芸運動の賛同者との会合や風致地区保存座談会にも出席し、史蹟や風俗の保存を提言している³⁵⁾。山口からは工芸の振興について、濱田や河井らの同人によって、壺屋の陶工を指導してほしいと要請されている³⁶⁾。柳のほうも、

工芸の隆盛は工人達への守護がなければならない。それには生産や販売の正しい組織が要る。或は組合の結成とか金融機関の設定とか、販売連絡の組織とかゞ合理的に行はれねばならない。さもないと仕事の永続や其の繁栄は望み難い。此の諸機関の設置は吾々自身の力に余ることであるが、併し少くとも滞在中に県の当局者や又は有力者や当業者達と其の重要性を語り合ふ機会を得たい³⁷⁾。

と語って、工芸の振興のために県側と話し合いたいという意向を伝えている。

柳は帰京後、東京で大規模な沖縄物産展を開催するために、高島屋の担当者などと交渉にあっている。第1次琉球ブームの火付け役ともいえる百貨店の活用である。柳は元々、百貨店の展覧会をはじめとする近代美術界の手法に対しては批判的であった。しかし1933（昭和8）年頃から民芸品展が百貨店の展覧会を通じて拡大していくのにもとない、展覧会という手法を最大限に活用するようになっていた³⁸⁾。柳は沖縄県との関係を良好に保ち、今後の民芸運動の拡大をねらったようである³⁹⁾。もっとも、従来よく行なわれていた県主催の物産展という形態ではなく、民芸運動独自の企画として展開したいと考えている。これは「新作工芸」（県の工業指導所が中心となって進めていた）が沖縄の伝統的な技法を無視しているとみていたからであった。しかしこの時点で、柳が沖縄の伝統的な技法に精通していた（歴史的な展開も含めて）とは、決していえない。伝統を重視する柳の姿勢は、戦後の1968（昭和43）年頃における民芸運動の動向に受け継がれている。濱田は戦後の民芸について、

民芸は何百年来続いているものなのに、四十年前民芸という言葉が出来てから始まったことでもあるかのように思われがちで、民芸らしきものを追うのに忙しく、似て非のものばかりふえました。私達は民芸の形よりも、根が確かかどうかを重要視することが必要だと思います⁴⁰⁾。

と語っている。濱田は戦後の安直な民芸品や民芸館ブームに警告を発している。

柳が沖縄の歴史や文化に精通していたかどうかはともかくとして、民芸運動は柳の沖縄訪問で勢い付く。民芸運動は前述のように、以後の民藝協会同人らによる集団での沖縄行きと、機関誌『民藝』の発刊で活気付いた。沖縄文化に魅了された柳は、その後1939（昭和14）年3月～4月、同年12月～1940（昭和15）年1月、同年7月～8月の計4回にわたって、沖縄を訪問することになる。2回目の沖縄訪問では、柳は夫婦で参加し、濱田、河井、芹沢らをはじめとする同人7名が同行した。同人らは、主に四つのことを行なっている⁴¹⁾。(1)生活から制作にわたる「協同」、(2)聞き取りや図書館での調査に基づく「研究」、(3)工芸の指導や座談会などでの意見の開陳を主とする「啓蒙」、(4)市場などでの古着の大量購入や風物の写真撮影などによる「蒐集」であった。2回目の沖縄訪問の成果は、『民藝』誌（1939年11月）の「沖縄特集号」（全89ページ）で発表される。この特集号は沖縄での交流が最大限に活用され、同人・地元文化人・県庁関係者など多彩な執筆者が加わっている。

しかし民芸運動としては活発な動きをしていたものの、沖縄の民芸について、柳は明確な提起をしていない。柳は1回目の沖縄訪問時において、王族・士族使用の工芸品と、民衆の使用する工芸品の区別を明確にしないままであった。沖縄史研究の比嘉春潮（1883-1977、以下は比嘉）は『民藝』誌（1939年11月）において、「今民芸として見るに足るものは紅型、緋でも漆器でも陶器でも、殆んど都会地で制作されたものか、又は政庁の役人の監督の下に制作された御用品であろう」と語っている。古い優れた作品の多くが、王府の御用品あるいは士族の愛用品、つまり「下手物」ではなく「上手物」の部類に属するものであった。とくに衣料については、身分的な差別は明確にあった⁴²⁾。衣服の布地や染料、そして柄のちがいで身分がわかるようになっていた。百姓は原則として木綿と芭蕉布以外の着用は禁止された。色彩にも制限があり、福木やウコンで染める黄色は王族専用であって、一般には禁止された。さらに久米島や先島にとって、御用布の貢納は重税を意味するものであった⁴³⁾。

沖縄の工芸品はこのような歴史的な脈絡をもっていたにもかかわらず、柳は民芸を取り上げる場合には、一貫してそれが有する「美的価値」を優先すると語っている。この点を際立たせるために、柳は柳田の「民俗学」との違いをもち出している⁴⁴⁾。柳は民芸（学）と民俗学の「両者の間に於ける不明な混雑や、無用な摩擦を越える」ために、民俗学とは相容れない自らの立場を明確にする。民芸（学）においては「何でも役に立つのではなく、美的価値の多いものほど存在理由を得る」と述べ、「醜いものは存在価値の低いものであって、かかるものは民族の文化を深く基礎付けるものではない」として民俗学を批判する。柳は役に立つものであっても「醜いもの」は民芸の対象ではないと言い、美的価値を強調する。柳の述べる通りであるとすれば、沖縄の民芸は王族や士族が使用した「上手物」ということになってしまう。

2回目の沖縄訪問は1回目の訪問と、その趣旨は大きく変わらなかったが、民芸運動として二つの成果を上げている。一つは民芸運動が沖縄県側の期待通りに産業化および商品化と密接

に関わるようになった点である。たとえば柳は沖縄県の期待に応えるべく、1939（昭和14）年11月には日本民藝館で「琉球織物古作品展」を、同年12月には東京高島屋で「琉球新工作藝品展」を催して、沖縄の美術工芸の紹介につとめている。もう一つは沖縄において、民芸に関する評価が変化していったことである。たとえば沖縄史研究者の島袋源一郎（1885-1942、以下は島袋）は、沖縄の民芸について従来までは「過去の物質的遺産に注目」していたが、柳らの影響を受けて、民芸運動の真意は「素直な親切な沖縄県民が、今少し古への剛健進取な民族性に立返り、勇往邁進して益其の文化を発揮すべし」と語っている⁴⁵⁾。沖縄文化は内側の論理で振興を図っていくのではなく、外に向かって拡大する方向を探るべきであると述べている。民芸運動に対する沖縄の知識人の反応は、島袋の発言にみられるように好意的なものもあった。しかしその一方で批判的な発言もあった。とくに批判的な意見は行政関係者に多くみられ、沖縄の貧しさと後進性を克服して、本土並みにしようと望むことから発せられていた。そのために琉装などは洋装に改め、伝統的な手仕事を機械工業化して手軽な特産物に衣替えしていこうと考えていた⁴⁶⁾。

3回目の沖縄訪問は、1939（昭和14）年の年末に、正月前後の休暇を利用して実施されている。参加者は26名に膨れ上がり、その陣容は前回の2回目と大きく異なっていた。その内訳は民藝協会同人9名、民芸品販売2名、写真関係3名、映画関係2名、観光事業関係2名、その他8名であった⁴⁷⁾。沖縄県庁との関係を良好に保つために、柳は沖縄文化の宣伝を積極的に担おうとした。そのために民芸運動に理解をもつ文化人を参加させて、沖縄文化の宣伝に役立てようとした。3回目の訪問団はその規模と陣容から「観光団」とも称され、周遊コースが組まれた⁴⁸⁾。さらに沖縄文化を東京でより効果的に宣伝するために、『琉球案内』などの編纂、絵葉書や映画制作などが企画された。柳は参加者のひとり（観光事業関係、国際観光局より派遣）である水澤澄夫（1905-1975、美術評論家）に対して、沖縄訪問の目的を「絵葉書と図録と案内記と映画を作って来ること」⁴⁹⁾と話していた。

この時には1回目の訪問時に柳が出席した「風致地区保存座談会」を拡充した「観光と文化をめぐる座談会」が開催される。柳はあたかも観光団を伴ってきた「プロモーター」ないし「コーディネーター」としての役割を担っている。柳の意図にそって、沖縄県は今後の地域振興の方向性を求め、民藝協会の同人らもそれに応えようとした。しかしそれぞれが思惑通りに進んだわけではない。民藝協会の同人と沖縄県との交流において、当然「啓蒙」や「指導」という要素が不可避的に入り込む。同人と地元の人びとの関係は、中央と周縁という関係を前提としているので、対等なものとは言い難い。さらに3回目の訪問は大規模なものであったので、この対等でない関係は、より増幅されたものとなった。これはその後の言語論争（後述）につながる布石となった。

しかしながら民藝協会の同人らによる沖縄訪問は、柳田らの民俗学の調査とは異なる形態をとっていた⁵⁰⁾。民俗学では地方から中央に資料を送り、中央にいる柳田がそれを手元を集めて

分析し、論文を発表するという構造が組み立てられていた。地元の民俗学者は単に聞き書きすればよいという偏向を生んでいった。それに対して柳は、あくまでも同人らの自主的な活動を重視する方法をとった。各人がそれぞれの分野で多くのことを学び、それが大きな影響を残すことになった。たとえば、芹沢が紅型から多くのことを学び、濱田も沖縄の影響を自己の作品にとどめていることなどである。

3回目の沖縄訪問の成果については、『民藝』誌（1940年3月）の「第二次沖縄特集号」（全95ページ）で発表される。この特集号の特徴は、観光団の結果をふまえて「琉球文化各論」の項目が設けられ、観光資源となる沖縄の風俗（墓制や琉装など）が個別に概括されていることである。この特集号のタイトルは「日本文化と琉球の問題」とされているが、当時の日本文化に対して、民芸だけに限定しない沖縄文化のもつ根本的な存在意義を訴えるものとなっている。同人らは「観光と文化」を強調する。この時の観光団の陣容から考えて、観光と文化を強調するのは当然ともいえるが、民藝協会同人が中心になっているにもかかわらず、民芸運動の脈絡からは外れてしまっている。しかしあえて観光と文化とした理由があると考えられる。それは1939（昭和14）年頃から柳らが問題視し始めた沖縄県の言語政策が関係している。これはその後「沖縄方言論争」（後述）へとエスカレートしていく。柳らは民芸だけでなく、言語の問題も含めて、民芸運動の範囲を広げて、観光と文化の問題ととらえていった。もっとも、これはあくまでも文化領域の問題として設定しようとしたのであって、当時の沖縄の経済的窮状を問題視して、それを分析して批判しようとする意図はみられない。したがって地域振興に資するかどうかは、ますます疑わしいものとなっていくので、沖縄県にとっては、結果として不満しか残らないものとならざるをえなかった。

1940（昭和15）年7月の4回目の沖縄訪問は、『民藝』誌（1940年11・12月合併号）の「沖縄特集号」（全122ページ）において、その成果が発表されている。この特集号はまさに前回から問題となった「沖縄言語問題」と銘打たれる。特集号には、一方で主に言語問題について、言語学者・民俗学者・評論家の一般的な「方言」擁護論が記され、他方で沖縄出身者による「沖縄学」の論稿や、同人らの「沖縄文化研究」と題した論述が掲載されている。民芸運動をめぐる議論や意見はほぼ影を潜める。沖縄方言論争の経緯は以下に譲るが、注目すべきは4回目の沖縄訪問が、わずか数人（柳を含めて3名）で行なわれている点である。当初、柳の沖縄訪問が地域振興に資すると考えた県庁との関係がこじれた影響である。もっとも、理由はそれだけではなく、民芸運動の対象地が沖縄から東北に移ったことも、大きな要因であった。東北では官民連携による農村の産業振興の観点から、ちょうど民芸展などが組織され始め、行政の支援も得られるようになっていた⁵¹⁾。柳はすでに1939（昭和14）年には日本民藝館で「東北各地蓑の類展」（2月）、「東北民藝展」（5月）を催し、翌40（昭和15）年には銀座三越で「東北民藝展」（6月）、41（昭和16）年にも銀座三越で「第二回東北民藝展」（6月）を開いている。沖縄方言論争が発生し、沖縄県庁との関係が悪化するなか、民芸運動の理念に呼応するのは、

沖縄ではなく東北であると考えられるようになった⁵²⁾。民芸運動の対象となる周縁から周縁の移動である。

柳は1938年～1940年の間に沖縄を4回訪れている。沖縄の民芸への関心が主であったとはいえ、それぞれの訪問の意図は徐々に変容していった。しかし変容があったとはいえ、何といても1回目の訪問時の感嘆は大きなものであった。柳は感銘を受けたものを「琉球の富」(『工藝』, 第100号, 1939年)⁵³⁾と述べて、具体的に墳墓・首里の町・本葺瓦・琉語・和歌・音楽・舞踊・琉装・染物・織物・陶器・彫刻・跋をあげている。柳が取り上げたものは、いわゆる工芸品だけではない。柳によれば、これらは民芸運動に包括されるものである。民芸の拡大解釈といえなくもないが、問題はこのなかに民芸の対極に位置すると考えられる「貴族的芸術」に属するものも少なくないという点である。柳のいう美的価値を重視すれば、当然入らざるをえないものであった。しかしながら、柳は沖縄の民芸が貴族的芸術にまで高められた歴史的な背景や経緯について無関心であった。もちろんそれを可能にした琉球王国の歴史にはほとんど触れることがない。さらに島津氏の侵攻以降、幕藩体制に組み入れられたことも、「琉球処分」についても語ることはない。工芸や芸能などの芸術の素晴らしさを語るとすれば、その背景となる琉球王国の交易史、王府の「貝摺奉行所」(工芸専門部署)「踊奉行所」などについても触れる必要があるが、それらについても記述が見当たらない。琉球王国の階層構造に関する記述も見当たらない。当時、柳らの民芸運動の姿勢に対して、文芸評論家の保田與重郎(1910-1981, 以下は保田)が批判している。保田は民芸運動の具体的な実践において「民衆の美の発見」と「民衆の職人」の形成という当初の意図から遊離してしまい、「工芸のみち」の追求それ自体が自己目的化してしまっていると鋭く批判する⁵⁴⁾。

柳は「琉球の富」の序において、

沖縄に於いてほど古い日本をよく保存してゐる地方を見出すことは出来ません。粗忽にも沖縄を台湾の蕃地の続きの如く思つてはなりません。(中略)人々は今迄余りにも暗い沖縄を語り過ぎてゐたのです。私達は優れた沖縄を語りたいのです。それは私達を明るくし島の人々を明るくさせるでせう。私達は実に多くの富に就て語り合ひたいのです。沖縄に就て嘆く人々の為に、又此の島に就て誤つた考へを抱く人々の為に、又自国を余りにも卑下して考へる土地の人々の為に、さうして真理を愛する凡ての人々の為に、此の一文が役立つことを望んで止まないのです⁵⁵⁾。

と記している。沖縄には「古い日本」があるという視点、台湾への差別的なまなざし、そして沖縄人が自分たちの文化を卑下しているといった指摘は、中央からみた周縁に対する同情的なニュアンスをもっている。しかしそれは一方で、高慢な雰囲気と啓蒙的な姿勢を漂わせているものでもあった。柳は啓蒙を通して、沖縄の「外からの敬念」「内からの自覚」という二つが

結合することによって、沖縄の繁栄があるとしている⁵⁶⁾。しかし現状の沖縄が繁栄とはほど遠い「貧困」にあえいでいるとすれば、この敬意や自覚が歴史的になぜ生まれなかったのかという問題に思い至るはずである。柳は美的価値を重視するあまり、民芸を生み出した民衆の貧困は眼中にないようであった。

5 沖縄方言論争の展開

沖縄方言論争（以下は論争）は1930年代後半の民芸運動の拡大期の流れ（運動の新たな対象地を求めていた）と、周縁であった沖縄の思惑（地域振興に期待をかけた）との間で、いわば必然的に起こった問題であった。この両者に共通する点は、沖縄を植民地とは異なるものとして、日本の一部（周縁）に位置付けている点である。異なっている点は、端的に言えば、柳らは沖縄の「個性」を強調し、沖縄県は「同化」を強調する点である⁵⁷⁾。当時、方言だけでなく、柳のいう「琉球の富」の多くが、行政による「文化統制」の対象になっていた⁵⁸⁾。たとえば、琉装・墓地・姓名・ユタ・演劇などである。しかしながら柳らは個性を強調するものの、前述のように、個性を生み出す元になった歴史性や政治経済状況は、ほぼ無視していた。したがって沖縄における民芸の概念は、はなはだ曖昧なものとなっていた。その一方で、沖縄県のほうは政治経済状況に対する配慮はあったものの、沖縄文化に関する認識は欠落していた。論争はまさにその縮図であったといえる。

柳による日本文化の個性の探究は、有形の民芸のみならず、無形の言葉にも向けられる。柳は「琉球語」こそが、日本語の原形を保持するとみなした。柳は工芸品とともに、琉球語についても高い評価を与えている。一般的に論争は方言をめぐるものであるとされているが、柳は沖縄語を方言とはみなさず、標準語と対等の言語とみなしていた。その一方で日中戦争開始（1937年）以降の沖縄県では、とくに方言を撲滅し、標準語を強制する政策がとられていた。標準語が強制され、方言が取り締まりの対象となっていた。その状態を沖縄で目の当たりにした柳は、沖縄県庁の言語政策を問題視した。

論争は厳密には、前述のように、柳の2回目の沖縄滞在中である1939（昭和14）年4月21日が発端となっている。当日、実施された座談会において、柳は琉装や「沖縄口」（沖縄方言）の制限、ならびにその廃止を奨励する政策について、それを問題視する発言をする。しかしそれに対する反対意見が出る。たとえば、

「埋れて捨てられんとした民藝については柳氏に満腔の感謝と敬服を捧げるが、琉装と沖縄口についての論には絶対に承服出来ない。私の家では標準語の外は一口も語らぬ様にしている。」「標準語を十分に語れない沖縄県人が他府県でどんな苦勞をし、出世が後れてゐるか。如何にしても、標準語を徹底して、後れぬ様にしなければならぬ。」「われわれ沖縄

県人や土地の風俗言語は骨董品ではない。新しい時代にはこんな取のこされたものを捨てて行かねばならぬ。「私共今日まで標準語の奨励徹底、琉装の廃止につとめて来た面目上、今日の御説は受取れぬ」⁵⁹⁾。

などの意見が出た。これに対して民藝協会の同人のなかから、主に河井が、「標準語は徹底的に習得するのがよい。だがその為は何故沖縄口を廃止しなければならぬか。この素晴らしい風俗言語を卑下せず、もつと自信を持つて貰いたい。われわれは沖縄の暮しを本質的に立派なものとして敬愛してゐるのだ」と反論している。この座談会での議論は、これ以上、問題になることもなく、この場で終わってしまった。

しかし1940（昭和15）年の3回目の沖縄訪問時に、言語をめぐる論争として再燃する。『民藝』誌（1940年3月）によれば、同人らが滞在中の1月7日に、那覇市公会堂において座談会（沖縄観光協会・郷土協会主催）が開催される。これは「観光と文化をめぐる座談会」のはずであったが、前年の言語政策をめぐる議論となってしまう、観光についての提言や問題は無視されてしまう。その席上、同人らは方言廃止が行き過ぎであると沖縄県庁を批判する。これに対して、標準語励行運動を奨励していた沖縄県庁学務部（以下は学務部）は、1月11日付の『琉球新報』『沖縄朝日』『沖縄日報』の県内新聞紙上において、「敢て県民に訴ふ 民藝運動に迷ふな」という声明文を発表する。これに対して柳は「国語問題に関し沖縄県学務部に答ふるの書」と題した記事を、同じ県内3紙に発表して反論する。学務部は、標準語奨励は県を挙げての運動として遂行されなければならないと強調する。これに対して柳は標準語を学ぶ必要性は疑いもないが、郷土の方言を軽視してはならないとして、沖縄方言の重要な価値を認め、標準語と方言との併用を求めている⁶⁰⁾。

柳の帰京後、言語問題として中央の論壇でも活発に論じられるようになる。論争に加わった知識人は、柳田、保田、長谷川如是閑（1875-1969）、阿部次郎（1883-1959）、萩原朔太郎（1886-1942）、清水幾太郎（1907-1988、以下は清水）らであった。その多くは基本的に柳の所論を支持していたが、評論家の杉山平助（1895-1946、以下は杉山）は標準語徹底と方言廃止の沖縄県の方針は正しいとする（『琉球の標準語』『東京朝日新聞』1940年5月22日付、「琉球の方言について』『新潮』1940年6月号）。杉山がこの見解を発表したことから、論争は改めて白熱化する。杉山に対する柳の批判である「沖縄問題に関する所信一杉山平助氏に答ふ」⁶¹⁾（『新潮』1940年8月号）、そして学務部の声明である「再び標準語に就いて柳氏に与ふ」（『琉球新報』『沖縄朝日』『沖縄日報』1940年6月25日付）、さらに学務部に対する柳の批判である「敢て学務部の責任を問ふ」⁶²⁾（『琉球新報』1940年8月2日付）というように論争が続いた。

柳と学務部による論争とともに、地元の新聞には、官吏や教師のみならず、一般市民まで巻き込んで、多数の賛否両論が寄せられる⁶³⁾。それらの意見では県の方針を支持する人のほうが、

柳らを支持する人よりも、かなり多かった⁶⁴⁾。柳のほうも多数の文章を発表するとともに、柳自身は言語学に関して造詣が深いといえないものの、沖縄文化の擁護という立場から沖縄方言にこだわりをみせる。柳は4回目の沖縄訪問をした際に、当時の淵上房太郎（1893-1976、以下は淵上）県知事と会見を行ない、沖縄県が推進する言語政策に対して異議申し立てをしている。しかし淵上知事は標準語運動については、学務部の方針にまったく変更はないと応えている。とくに沖縄県の標準語運動は、太平洋戦争を目前に控えて、戦時体制下の精神統一過程に組み込まれる様相を呈していたので、変更できるような状況にはなかった。

柳らの主要な論点は、日本語における沖縄方言の位置付けの高さということであった。柳によれば、日本語は必ずしも純粋に成り立ってきたものではなく、改良の余地を残している。日本語の将来のために、沖縄方言は貢献する可能性がある。したがってこれを弾圧するのは如何なものかということであった。沖縄の民衆も方言のなかでこそ、自由に生き生きと生活しているので、方言を弾圧することは、県民に屈辱感を与えることになるかと非難する。これに対して学務部は、沖縄の土語（方言）が言語学的に誇りうるものであることはわかっているので、それを学問的に調査して資料を保存することは、有意義であると考えていると語る。しかしこのことと県民に繁栄をもたらす教育行政とは別のことであると反論している⁶⁵⁾。

当時、県立図書館の館長であった島袋全発（1888-1953、以下は全発）は、県庁に対して疑義を呈している⁶⁶⁾。全発は「柳宗悦氏がいくら有名人なりとして、その声明書一たび出でて、所謂指導者たちが、かくも大騒ぎせねばならない県を情なく苦々しく思ふ。率直に私の感じを披露すれば、それは卑怯者の心理でしかない」と語る。そして県の姿勢に問題があるとする全発は、県の政策と柳の論調のいずれにも同調しない独自の見解を述べている。全発は「正直にいつて訛誤かごの多い今日の琉球方言には、私などもあまり執着はない。これをもつて文学を創作せよなどと言ふのは、夢のなかで踊つてゐるやうなものである。その語るの貧弱さは話にならない。今日の世の中で、よくも琉歌を詠んで楽しめるものだとあきれる位である」と語り、柳の擁護する方言を冷めた眼でみている。全発は方言文学や琉歌に対して否定的な見方をしているものの、「標準語奨励すべしとの信念を愈々固めつつある者である。而して方言亦撲滅す可らずの信念を有す」として、標準語奨励のために方言を撲滅することには反対している。全発は1940（昭和15）年4月に、この論争が原因で、淵上知事から図書館長職を解任、更迭されている。

全発とはいささか異なり、沖縄の知識人は、おおむね県側に近かった。そのなかには「沖縄方言よ、標準語の母の懐に溶解せよ。而してお前の永遠の世界に不滅し市民権を獲得するのだ」という意見や「私どもの標準語奨励は県民をして一人もらさず日本人たらしめんとする啓蒙運動であるのだ」という意見もみられた⁶⁷⁾。方言の誇りは標準語に含まれることによって保たれるということである。当時、県庁に勤めていた真栄田義見（1902-1992、戦後に沖縄大学学長）は、方言が次第に忘れ去られていく運命にあるとした上で、これに県民の教養によって発展性

と永遠性を与えるべきであるとしている。これらの意見はマイナーな文化がメジャーな文化に対抗して、なんとか生きのびる道を模索しているかのようである。このような意見以外にも、方言をめぐるさまざまな意見が出されることによって、沖縄方言が注目され、その方向性が真剣に論じられた。しかしながら戦時体制下に入るにつれて、方言をめぐる議論はこれ以上、実質的な進展はなかった。

柳は元より標準語の励行に反対していたわけではなく、その重要性についても十分に認識していた。しかし県民が自由な自己表現を行なっていくには、沖縄語が必要不可欠であると考えていた。柳は標準語の奨励とともに、沖縄語の価値も尊重しなければならないと主張する。標準語も沖縄語もともに「国語」として対等に尊重されなければならないとする。「標準語は共有の国語」であり、「地方語は特殊の国語」であり、「各々のものには各々の職務がある」⁶⁸⁾という。したがって「両方を共に活かすことこそ大切」であり、「公用の場合は標準語を使い、私用の場合は土語を楽しむ」ことが、「言語の妙用」であるとも説いている。さらに柳は沖縄語に「最も古格ある大和言葉」が多く保たれているともみなした。そして外来語が不必要に混ざった「東京語」にもとづく標準語を、より日本語の原形に近い沖縄語などの地方語によって正していくべきであると考えていた。明治政府の言語政策は、標準語によって方言や地方語を矯正ないし禁止しようとするものであった。これに対して、柳は逆に沖縄語によって標準語を矯正していくべきであるとして主張していた。柳は政府による文化的同化政策（皇民化政策）に抵抗し、標準語と方言の関係を対等なものにしようとした（この点では、方言を標準語の下位に位置付けようとした柳田とは、とらえ方が大きく異なっていた）⁶⁹⁾。

しかしながら沖縄県民による柳に対する反発は、柳の予想に反して大きかった。柳の発言は沖縄県を好奇心の対象にしていることから出ているのであって、単なる旅行者の一時的な感興からなされたものであると受け止められた。学務部社会教育主事の吉田嗣延（1910-1989、戦後は沖縄協会専務理事）が『沖縄朝日』紙において、柳は沖縄県を好奇心の対象にして、「観賞用植物」か「愛玩用動物」程度にしか思っていないのではないかと批判する。これに対して柳は、他府県では実施されていない標準語奨励の運動を、学務部が沖縄県のみで行なうことは不自然であり、県民に「屈辱の思い」を与えているのではないかと反論し、そこには沖縄の言語を野蛮視しているきらいがあるのではないかと問いかけている⁷⁰⁾。柳は中央の優越感をもって標準語を強要するようなやり方を非難した。

ところで沖縄方言をめぐるのは、すでに伊波が大正期から意見を述べている。伊波は沖縄方言に関しては、県側に近い立場をとっていた⁷¹⁾。1928（昭和3）年には「沖縄の文学青年が、たとえばアイルランドの作家たちが英語で世界的文学を書きあげたように、日本語で一人前の作品を書く日は、よほど遠いことだろう」と嘆いていた。さらに1939（昭和14）年には「沖縄方言を撲滅する道は二つ。教員に他県人をふやすことと、放送局をつくることだ」と述べ、言語政策へ思い切った建議を試みている。翌40（昭和15）年には、「沖縄方言はいずれ滅びる。

これは研究と記録を残すことしかできない。ただ、かつて県が中央から専門家を招いてその準備をするようにと建言したのに、容れられなかった」と、その立場は沖縄県と同一であるものの、県の政策に関しては批判的であった。

そもそも沖縄県の言語政策は、1880（明治13）年に会話伝習所を県庁内に創設したことに始まる。この創設にあたり、『沖縄対話』という上下二巻の教科書を、当時の学務課が編纂している。『沖縄対話』は会話伝習所の後身の師範学校でも使用され、小学校でも採用された。伊波の著書『沖縄歴史物語』によれば、「もっとも生徒の興味をそそったのは、例の『対話』であった。まず国語を唱えて、後に沖縄訳を付け、いずれも唱歌などのように、調子をつけて謡い、少しも無理じいな所がなかったので、瞬く間に都鄙に宏通するに至った」⁷²⁾としている。

伊波は後年『沖縄対話』を基礎にして『琉球語便覧』（糖業研究会出版部、1916年）という著書を刊行している。その凡例において、「『沖縄対話』に採用された琉球語は、もとより琉球の標準語なる首里語であつて、^{ごえく ちょうい}護得久[朝惟]代議士の父故護得久按司朝常氏等が、当時沖縄県庁の囑託を受けて編纂されたのであるから、比較的上品な言葉である」⁷³⁾と沖縄語の成立事情を説明している。もともと沖縄語の使用自体にも、工芸と同様、身分による差別があった。首里の王族や士族の使う上品な言葉は「公用語」とされていたが、一般的に使うことが禁止されていた。さらに各島々や各村々によって、使用している言葉が異なっていたので、沖縄には各地域すべてに通用する共通の沖縄語は存在しなかった。上品な首里言葉を聞き慣れない首里以外の地域や離島の人びとにとって、沖縄県庁のいう標準語はもとより、沖縄方言でさえも、馴染みのない言葉であった。したがって、その学習はいわば二重の困難をともなっていた。ここに差別の根元があったことは、すでに沖縄史研究の比嘉春潮（1883-1977、以下は比嘉）や仲原善忠（1890-1964、以下は仲原）によって指摘されている⁷⁴⁾。

沖縄文化研究の外間守善（1924-2012）は『沖縄対話』の歴史的役割は、新教育普及の推進役であったと説明している⁷⁵⁾。しかし師範学校の開校当時に初等科の生徒であった太田朝敷（1865-1938、『琉球新報』紙を創刊した言論人）は、算術以外は勉強する気にもならなかったと回想している⁷⁶⁾。太田朝敷をはじめとして標準語の押し付けに対する反発も根強いものがあつたようである。しばらくの間は、標準語は官吏の言葉とされ、学校外の一般社会にはほとんど普及しなかった。師範学校や中学に通うのは士族の子弟であり、平民の子は例外的な存在でしかなかったからである。1893（明治26）年に師範学校附属小学校高等科に入学した比嘉は、

同級の大部分は首里士族の子弟で、中に^{なきじん}今帰仁、^{かつれん}勝連、^{みさと}美里、^{おおむら}大村等々御殿の御前小・^{わかあじ}若按司たちもいた。ほかにまた田舎は^{よなぼる}西原、南風原、与那原などの子供が通い、那覇や泊から来るものもいた。まだまだ身分制度が生きている時だから、貴族階級に属する御殿や^{とんち}殿内など名家の子弟の鼻息の荒さは大変なものだった。大和人はともかく、訓導でも教生

でも彼らには敬意を表し、言葉づかいからちがえて対した。一方、彼らは教師といえども、山原や離島の出の教生には軽侮の情をもって接したものだ⁷⁷⁾。

と回想している。ここでいう「田舎」とは、首里や那覇に住む特権士族と異なる百姓の住む地域を指し、差別意識が言葉づかいからも伝わってきたとされている。

このような状況下で日清戦争(1894～1895年)以降において、沖縄県では他府県並みとなるのが最大の課題とされ、標準語を強制する方針がとられた。学校などの教育の場を中心に「方言札」(標準語奨励のためにとられた罰札制度)を使用するなどの罰則を設けながら、方言を禁止し、標準語を強制する方針がとられた。しかし差別意識は根強く、第一次大戦後に至ってもなお差別構造は変わらなかった。このために沖縄県民は差別からの脱出願望が強く、出稼ぎに出る場合も出自を隠して働く者が多かった⁷⁸⁾。標準語問題もこのような観点からとらえられていた。方言を禁止しようとする傾向は、1937(昭和12)年の国民精神総動員運動(第一次近衛文磨内閣)が開始されて、さらに強まる。この運動の実行委員会が設置され、「標準語励行運動」が強行されたからであった。

沖縄では前述のように、1939(昭和14)年に県庁によって全県的な標準語励行運動が展開された。たとえば、「普通語」の使用不可者のブラックリストを作成して、標準語を励行していない村や、標準語を用いない者には窓口での受付を拒否、方言で応答した職員には罰金を科す役場もあった⁷⁹⁾。この方言の取締りは、生活改善運動の一環をなすものでもあった。琉装・琉髪・姓名・年中行事などが本土風に改められるとともに、土着宗教にかえて国家神道の浸透が図られていった。さらに「ユタ」(祈願や治病などを行なう民間の巫女)を取り締まり、「ウタキ(御嶽)」(村落祭祀の中心となる聖地)が再編され、一村一社の神社建立が全市町村によびかけられていった⁸⁰⁾。

この生活改善運動の展開のなかで、論争が起こった。論争において柳が問題視したことは、前述のように標準語を強制的に押し付けることによって、沖縄県民に劣等感を植え付け、自文化への誇りを失わせていることであった。沖縄をあたかも植民地であるかのように扱っていることへの異議申し立てである。それと同時に沖縄県民に対しては、経済的に貧しくとも、優れた工芸や言葉があるので、精神的に萎縮すべきではないと訴えている。自分たちの文化に自信と誇りを持ち、それらを存分に活かしていくべきだと説く。こうして民芸運動は、工芸や言語の問題を含んだ「文化」問題を対象としていくようになる。4回目の沖縄訪問の後、沖縄県知事に呈する書として、柳は「琉球文化の再認識—沖縄県知事に呈するの書」⁸¹⁾を執筆し、民藝協会も「沖縄言語問題に対する意見書」(『民藝』、1940年11・12月合併号)を出して、論争は多くの課題を残したままで、一応の終止符が打たれた。柳は工芸や方言などに対する関心をふまえて、それらを含んだ沖縄文化を解明し、その価値を正当に評価するという問題へと軸足を移していく。

6 沖縄文化の再考

柳は方言よりも、さらに大きな「文化」を問題にすべきであると考え、柳は、

私共にとっては標準語問題の如きは末葉のことで、沖縄文化論のごく一部分を占むるに過ぎぬ。それ故この問題を長々と論じる気持ちをもたない。吾々には餘りにも常識的な問題に過ぎないからだ。吾々の主眼とする所は、文化価値としての沖縄の存在を重く見たいと云ふ事と、従つて県民自らに其の自覚を促すことにある⁸²⁾。

と述べ、自らは沖縄文化論に主眼があると考えていたという。さらに続けて、今後の沖縄振興の道は二つに要約されると説いている。それは、

- (一) 他府県の者が沖縄の存在を尊敬することである。その為には文化価値としての優れた沖縄が正当に紹介され、理解されねばならぬ。
- (二) 沖縄県人が自己の文化に対して自信を持つことである。何よりこの精神振興が沖縄の将来にとって大切である。今迄のやうに不必要な卑下を早く放棄せねばならない。

ということであった。そして民藝協会の同人らに対しては、地元の「工人」らに学び、ともに伝統を現在に生かす仕事の実践を訴えている。

沖縄を「美の浄土」⁸³⁾という柳にとって、沖縄文化から受けた影響は計り知れないものがある。しかし沖縄文化は、果たして柳のいう民芸運動と呼応できるものであろうか。柳は沖縄訪問以前の「上加茂民藝協団」(1927～29年)の挫折経験から、「個人作家」と「工人」とが学び合い、ともに仕事を進めていくのは、如何に困難なことであるかがわかっていたはずである。「日本民藝館」の開館(1936年)頃には、柳はすでに個人作家と工人の関係を固定的にとらえ、日本民藝館の展示品についても、工人の作品に限定するものではないと語っている⁸⁴⁾。実際に日本民藝館では優れた美であるならば、在銘・無銘にかかわらず陳列するとして、等楊(雪舟)の絵も展示している。民藝協会の同人から投げかけられた、民芸と等楊がどのような関係があるのかとの問いかけに、柳は「吾々は民芸品なりと、美術品なりと何ものに対しても常に自由な一双眼を具えるべきである」⁸⁵⁾と答えている。確かに民芸品や美術品という枠にとらわれない見方が、民芸の掘り起こしには重要であった。しかし「美」の概念が抽象的なものである限りは、この見方では必然的に優れた美に向かい、ひいては個人作家の作品に眼が向くことになってしまう⁸⁶⁾。

この結果、民芸運動のなかで工人ではなく、個人作家を重視した柳の言動に違和感を覚え、民芸運動を離脱する人も出てくる。その逆に個人作家であった河井は、晩年には「民芸作家」

と呼ばれることを潔しとせず、柳から離れていった。しかしながら柳が沖縄の民芸は個人作家の創作する工芸品ではなく、あくまでも工人によって制作される民芸ととらえていたとすれば、民芸運動の当初の趣旨と合致していなくもない。もしそうであるとすれば、柳の沖縄の工芸品に対する認識は、あいまいで皮相的であったと言わざるをえない。これはおそらく沖縄という地域自体に対する認識が不十分なことに由来するのであろう。「中央からみる周縁」という姿勢の限界であるともいえる。

ところで柳が民芸の背景にあった「文化」を強調するのは、独特の思想的背景に基づいている。背景のひとつは柳の経歴から考えて、白樺派的ヒューマニズムであったことは確かである⁸⁷⁾。それとともに沖縄文化を取り上げる背景には、柳が東恩納（沖縄県庁の嘱託を受けて沖縄語の編纂にあたった護得久御殿の書生であった）や伊波の主張に注目していたということがある。東恩納は方言論争の際に、沖縄が朝鮮や台湾と同様に扱われているのは、「県人を侮辱した僭越の沙汰」であると語り、沖縄が植民地扱いされることを憤っていた⁸⁸⁾。また伊波は沖縄人への差別に憤りながらも、沖縄人自らもつ劣等感の克服という課題とも格闘し、劣等感を解消するためには、琉球固有のものを重視しなければならないと考えていた⁸⁹⁾。柳はこの二人から影響を受け、沖縄と植民地との区別、そして沖縄の個性を強調したと考えられる⁹⁰⁾。

1990年代以降の柳に関する研究においては、柳が沖縄県民の置かれた複雑な社会状況に対して、現実的な配慮をしていなかったという理由で、論争時の柳の姿勢を批判的にとらえる傾向が強い⁹¹⁾。しかし柳の姿勢だけに問題があったのではなく、論争時に県民が示した行動から考えれば、差別からの解放を最優先させることが、いかなる場合においても最善というわけではなく、むしろ陥穽もあったことがわかる。論争を通して柳が強調したかった点は、柳には複雑な社会状況に対する配慮が欠けていたとはいえ、近代日本の周縁に追いやられた沖縄を、民芸や言語を通して日本のなかに正当に位置付け、その地位を引き上げることにあった。それによって皇民化政策に抵抗するとともに、沖縄県民に対しては、近代西洋の模倣をしている従順な日本国民と同じにはならないように訴えた。柳は沖縄ほど「固有の日本がよく保存されている土地」はないと語る一方で、そこには外来（とくに中国や朝鮮）文化の要素の含まれていることを認識していた。しかも柳によれば、沖縄文化は外来のものの模倣にとどまっているのではなく、「すべてのものを琉球の血と肉とに変え」、「大和の風を止めている」とみなせる。外来文化であっても、模倣の域を脱して十分に消化すれば、それを自文化とみなすことができるという、柳独特の解釈があった⁹²⁾。

しかし柳のこの解釈には、政治的格差の意識がその視野から欠落していた。この欠落は社会経済的な不平等の温存につながるものになってしまう。この点で柳は、自身の主張自体が客観的にどのように受け止められるのかという細心の注意に欠けていた。民芸運動が民衆に関心を向けた運動であるとすれば、このような配慮に欠ければ、致命的な欠陥となってしまう。沖縄語が標準語に代わりえるものでない以上、柳の主張は文化的な個性を強調しているのかもしれ

ないが、その主張にこそ差別や格差が内在していることになってしまう⁹³⁾。もちろん沖縄県庁の側の主張にも、同様のことがみられるのは否めない事実である。

当時、台北帝国大学で民俗学を研究していた金関丈夫（1897-1983、以下は金関）に宛てた柳の書簡（1940年10月3日付）が残っている⁹⁴⁾。論争に関する金関の寄稿に対して、柳が書き送った礼状である。金関の原稿は『民藝』誌には掲載されなかったが、その論旨は金関の視点から、論争における柳らの主張が「文化価値問題」に集中してしまっていて、「人道問題」に基づく県庁への批判ではないようにみえるというものであった。金関は民芸運動に対して、一定の批判を加えているが、柳は金関の人道的立場を重視する見解に賛同を示した上で、権力を批判するには人道的な「義憤」なしにはありえないと抗弁し、金関との意見の一致をみていると述べている。しかし金関の原稿から窺える疑問点は、人道的立場を有するかどうかではなく、民芸運動が文化問題に特化することによって、論争での議論の焦点があいまいなものになったのではないかという点である。これに対して柳は、植民地である台湾と「日本系文化価値に甚だ富める所」である沖縄とは、状況が異なっていると答える。台湾であれば、朝鮮と同様に人道問題をめぐって主として論陣を張るが、沖縄では「文化価値問題として取り上げる方、人々を納得さす上に遥かに効果的だと考えた」と語っている。柳は文化価値を強調するあまり、人道問題という根本的な点で、沖縄と植民地との結節点を消し去ろうとしている。

柳の場合には、沖縄と植民地の関連性がいまいちというだけではなく、沖縄内における権力者と民衆、そして本島と離島との政治経済的関連がいまいちなままで、沖縄文化論を展開している。民芸の担い手である民衆とは、沖縄県民のことを意味するとすれば、柳が沖縄を訪問した際に、琉球王朝時代の工芸品については、むしろ触れることができないはずである。民衆（平民）は王族や士族ほどに美しい工芸品に囲まれていたわけではない。たとえば芭蕉布の絢が民衆のものとなるのは、明治期以降である。もちろん逆に王族や士族が使う「上手物」すべてが、工芸品として優れているというわけでもなかった⁹⁵⁾。

柳は民芸の「民」は民衆の民であり、平民の民であると語る。しかも柳は、

民という言葉の内容を特別なものに解してはいけない。もっとも当たり前な内容に受け取ってよい。この「当たり前」という事以上に、無上の内容はないというのが、私の真意なのである。私は近頃これを簡単に「平ひらの者」「平の物」「平の茶」という風に種々の面で用いたい気持が強い。「平」は、当たり前のもという義なのである。もっともこれにまた執すれば、「異」を好むのと五十歩百歩になる。「平のもの」とは、何にも囚われぬそのままの意である⁹⁶⁾。

と説明する。そして民芸をこの囚われない目でみれば、「美しさ」がわかるという。

そうであるとするれば、王朝時代から伝わる沖縄の工芸や芸能には、王族・士族・平民の区別を問わない「美しさ」があるのかどうか、それとも王族や士族の「上手物」や芸能には、「誤っ

たもの「偽りのもの」がないのかどうか問われなければならない。これは沖縄の「美」と「歴史」「現実」を関連付けて解明しなければならない点である。しかし柳には、その課題が残されたままである。論争に加わった清水は『民藝』誌（1940年5月号）において、「その後の琉球問題」と題して、

沖縄県が特殊な事情の下に立つのは、恐らく過去に於けるその政治的な運命に依るものである。そこに標準語励行の政策が採用される理由があり、且つ現在の日本の国家的事情が自らこれを強化せしめてゐるのであらう。これは不可避的な必然的な現象である。また標準語の励行が効果を収めるためには、方言が多かれ少かれ軽蔑されて行くことも、実際の問題として殆ど避け難いところである。（中略）一方に立つてゐるのは文化の高い要求であり、他方に立つてゐるのは政治と経済の動かし難い必要である。前者の眼は遠く放たれてをるのに反し、後者の眼は眼前の問題の解決に向けられてゐる。論争が到底結着を見ないのとは言はずして明かである。二つの問題が決して無縁ではないとしても、両者を真に結合し得る人は超凡の力量を持つものでなければならず、而も深く銘記すべきは、如何なる文化の要求と雖も、日常の身近なる問題の解決と結びつくことなくしては、終にこれを充すことが出来ぬといふ点である。換言すれば琉球文化及び言語の保存と活用とは、これを単に文化の問題として取扱ふ限り、決して解くことが出来ないのであらう（『民藝』、1940年5月、5～6ページ）。

と記している。沖縄文化の問題は、単に文化の問題としてではなく、日常生活に関わる政治経済の問題と結びつけて考えなければ、解決は困難であるという。清水は政治経済と文化を結び付ける人物の出現を期待しているようであるが、そこには明らかに問題を生み出していた「歴史」への認識の欠如がみられる。

清水の主張に対して、『民藝』誌の編集部は反論を加えて、

清水氏の所論のなかで、われわれのもっとも不満におもふのは、一体評論とはなにかといふ本質的な問題である。清水氏の所論は単に文化と現実乃至政策的なものとは、相入れがたいものとして、そのふたつを峻別をしてゐるのみである。評論とは、はたしてそんなものなのだろうか。評論とは逆に現実と理想とを総合して、より高次な立場において批判することではないか。つまり、われわれの主張と県当局との意見を理想と現実においてみるのではなしに、われわれがひとつの理想をもつて、沖縄で仕事したその現実の成果に対する批判こそ、のぞましいのでないか。清水氏に対する結論をここにのべれば、結局清水氏が今回の批判の対象とされたものよりも、われわれは現実において一歩先んじてゐるといふ事実である（『民藝』、1940年5月、6～7ページ）。

と応えている。民芸運動の成果を強調する内容となっているが、この反論でも清水の主張と同様に「現実」と「理想」（未来）の強調がなされる。この点では清水の場合と同様、現実のあるべき姿は、歴史（過去）の展開のなかでこそ導き出せるという認識の欠如がみられるのである。

7 結びにかえて

1930年代のわが国における工芸の世界は、それまでのモダニズムの躍進に抗うかのように、土着的なもの、伝統的なもの、ローカルなものへの志向が高まりをみせ、民族固有の様式や伝統的な手工業を保護しようとする動きが、各地で現れる⁹⁷⁾。それまでのモダニズムの浸透と機械による大量生産によって、モノに表出される民族性や地域性が希薄化することへの反動ともいえる。これは伝統的な生活文化や風土に根ざした土着的なものに「人間味」を見出そうとする新たな価値観の発現であった。柳らの民芸運動も、こういった流れのなかにあった。柳は日本の周縁にこの「日本的なもの」を見出そうとする。

柳は沖縄に代表される周縁の文化的価値を、東京を中心とする都市の文化との対比においてとらえる。すなわち都市の生活には、欧米の不必要な模倣や、外国への追従が無数にみられ、そこでは健やかなものが失われている。都市は国際的な雰囲気醸し出しているものの、日本の個性が希薄となり、欧米に対して他律的・追従的な存在となってしまっている。これに対して、周縁のものは新しさからは遠く離れ、時代の流れには掉さすことがないものの、日本の存在を明確に示す要素があり、文化的価値は高い。都市の人びとは周縁に対して、しばしば「軽蔑のまなざし」を向け「野暮で遅鈍な場所」とみている。しかし周縁には「迅速な前進」はなくても、「誠実な歩行」がある。周縁では「民衆がよく日本的なるものを支えている」として、周縁こそは「日本的なるものを保有し建設する貴重な単位」であるとする。周縁の「文化価値への認識なくして、国家は健全な発達を遂げることはできない。文化は国際的に広げられると同時に民族的にも深まらねばならぬ」とする。柳は日本が文化的に自律的存在となり、個性を発揮できるようになるためには、周縁の文化を大切にすると強調した⁹⁸⁾。

柳が沖縄の民芸や方言を称えることによって、周縁の文化の重要性を訴えただけではない。柳は各地域がその土地の気候や風土を反映して、それぞれに特有の材料・形・模様を活かして、特色あるモノを生んでいると考える。周縁は自分たちの文化を中央のものから遅れた価値のない文化とみなして、自らを蔑まず、劣等感に起因する不必要な模倣をすべきではないという。自己を抑圧せずに誇りをとりもどし、もてるものを十分に発揮することが重要である。むしろ高いところに位置すると自負する中央こそ、周縁に学ばなければならない。日本が世界に誇ることのできる文化の基盤は、周縁にこそあると認識すべきであると訴える。

これは西洋文化の模倣に駆り立てられていた中央に向けられた言葉でもある。柳は各地域に

はそれぞれ独自の価値ある生活文化が必ずあるはずであると確信し、地元の人がいまだ十分に認識できないでいるモノを取り上げて称揚した。柳は地元の人が自分たちの文化を守りながら、地位向上をはかっていくことができるよう、それらを称える文章を書き、展覧会や展示即売会を次々と開催した。さらに地元で培われた方法を生かしながら、モノの質の向上をはかるために指導を行なった。

柳が周縁の文化の価値を重視し始めたのは、1920年代後半以降であった。1928（昭和3）年に刊行した『工芸の道』のなかで、工芸の美という観点から「地方色」を強調した⁹⁹。しかしながら戦時体制が徐々に進む中で、柳らによる民芸運動は、その体制に取り込まれていった。1937（昭和12）年に近衛文麿内閣は国民精神総動員運動を開始したが、これは当初は享楽的要素を強制的に抑圧しながら、国民を画一的に組織化しようとする政策であった。しかし強制的な施策では国民の不満も大きくなるので、政府は国民の意向に適った効果的な方法を探り、それによって戦時体制の確立をはかっていこうとする。そこで1941（昭和16）年頃から「文化国策」の一環として、地方や農村の文化を称揚する方法が奨励され、知識人も動員され、地方文化運動ないし農村文化運動が推進されていった。柳らは画一的な国策には反対であったものの、結局、地方文化運動においては国策と共振していくことになってしまう¹⁰⁰。

柳をはじめとする民芸運動家らは、政府による地方文化運動の奨励に先立ち、1940（昭和15）年頃から自発的に政府関係者への働きかけを行なっている。翌41（昭和16）年には柳と内閣情報局や大政翼賛会文化部との関係が近くなっていく。大政翼賛会文化部は、同年1月に「地方文化新建設の根本理念及び当面の方策」を発表し、そのなかで日本文化の「正しき伝統」が、「外来文化の影響の下に発達した中央文化」よりも、「地方文化」のなかにみられるとする。そこでは郷土の伝統と地方の特殊性が尊重されるべきであると謳われた。このような地方文化運動の高揚のなかで、民芸（運動）は重視される存在となっていく。当面の方策のなかでは、「民芸の保存とその健全なる発達を指導すること」が掲げられた。柳が1942（昭和17）年に刊行した『工藝文化』（文藝春秋社）が、文部省の推薦図書となったことも、そのひとつの現われであった。

柳が地方文化を重視すべきであるとしたのは、もちろん戦時下の時流に乗ることがきっかけではない。柳は少なくとも地方文化運動が開始される約10年以上も前から、周縁の文化を重視していた。柳の「美」の重要な要素には「地方性」があり、これはもちろん国家政策によって強制されたものではなかった。しかし結果的に国家政策に取り込まれていくことになるのは、柳による周縁文化の重視が、とりもなおさず脆弱なものであったからである。その脆弱性は、沖縄の場合で明らかのように「歴史性」の認識の欠落に由来していた。この認識の欠落は、民芸という概念や、民芸の担い手である民衆概念のあいまいさ（具体性の欠ける抽象度の高いもの）につながるものであった。

柳は地方文化の振興に力を入れる一方で、日本をアジアの盟主とみなす動きや、政府が奨励

する文化への同化政策には一貫して反対していた。当時の国民精神総動員運動のような抽象的で観念的なイデオロギーには警戒的であり、民芸品に代表される具体的なモノによって、国民の文化を表現していくべきであると考えていた。しかし民芸運動の賛同者のなかには、民芸による戦意昂揚や、民芸精神による大東亜共栄圏の生活文化の建設を積極的に説き、華北や満洲国に民芸運動を広げていこうとする人もいた。これは基本的に柳の意思に反する行動であった。しかしその柳自身も「朝鮮を見、日本を見た眼と心とで、親しく支那を観察したい」と願い、1936（昭和11）年には満洲を、1940（昭和15）年には北京を訪れた。その後、柳は満洲や華北での民芸運動にかかわりながら、国策と共振していくことになる。柳はこの動きを民芸運動に限定されたものと考えたのかもしれないが、国家政策における位置付けという点で難しい選択を迫られたことになった。そして結局、国家政策の一端を担うことになったのは否定し難い事実である。

注

- 1) 「民芸」という用語は、1925（大正14）年12月末に柳らによって生み出された造語である。拙稿「民芸運動の展開と上加茂民藝協会の結成」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』、第20号、2015年、161～5ページ）。
- 2) 柳宗悦「なぜ琉球に同人一同で出かけるのか」（柳宗悦『柳宗悦全集著作篇』第15巻、筑摩書房、1981年、23ページ）。以下は『全集』と略す。出版社および刊行年も略す。
- 3) 柳宗悦「河井寛次郎宛書簡」（『全集』第22巻下、97ページ）。
- 4) 柳宗悦「なぜ琉球に同人一同で出かけるか」（『全集』第15巻、22～5ページ）。
- 5) 多くの沖縄の知識人は、歴史性をどのようにとらえるかに苦心した。拙稿「東恩納寛惇と沖縄史学の展開」（『京都産業大学論集人文科学系列』、第43号、2011年、14～46ページ）；拙稿「真境名安興と沖縄史学の形成」（『京都産業大学論集人文科学系列』、第45号、2012年、1～34ページ）；拙稿「仲原善忠と沖縄史研究一郷土から生まれる歴史観」（『京都産業大学論集人文科学系列』、第47号、2014年、239～78ページ）。
- 6) 中見真理『柳宗悦一時代と思想』、東京大学出版会、2003年、142～51ページ。
- 7) 拙稿、前掲論文、『京都産業大学日本文化研究所紀要』、第20号、2015年、165～68ページ。
- 8) 柳宗悦「日本民藝館」（『全集』第16巻、182ページ）。
- 9) 「下手物」という呼び方は、京都の弘法の市や天神の市で使われていた。柳と河井は、頻繁にこれらの市に通っていた。
- 10) 水尾比呂志『日本民俗文化大系（6）柳宗悦』、講談社、1978年、108～10ページ。
- 11) 白土慎太郎「越境する「工芸」—日本民藝館のコレクションと柳宗悦の工芸観」（日本民藝館監修『柳宗悦展—暮らしへの眼差し』、NHKプロモーション、2011年、20～3ページ）。
- 12) 豊平良顕「沖縄の民俗文化と柳宗悦」（『全集』第15巻、月報第7号、1～2ページ）。濱田は生涯を通じて沖縄とは密接な関係をもった。
- 13) 前崎信也『大正時代の工芸教育—京都市立陶磁器試験場附属伝習所の記録』、宮帯出版社、2014年。
- 14) 濱田庄司『無盡蔵』、講談社学芸文庫、2000年、116～8ページ。
- 15) 同上書、88～94ページ。
- 16) 柳宗悦編『琉球の陶器（復刻版）』、榕樹社、1995年；濱田庄司、前掲書、2000年、30～5ページ。
- 17) 与那原恵『首里城への坂道—鎌倉芳太郎と近代沖縄の群像』、筑摩書房、2013年、189～90ページ。
- 18) 同上書、191～2ページ。
- 19) 鎌倉芳太郎「紅型とともに半世紀」（鎌倉芳太郎『紅型』、泰流社、1976年）。

- 20) 柳宗悦「日本民藝美術館設立趣意書」(『全集』第16巻, 3~12ページ)。
- 21) 大正末期から昭和初期にかけては、それまでの沖縄研究と異なり、沖縄出身の研究者だけではなく、県外の研究者も増加し、沖縄独自の問題にとどまらず、広い視点から研究の進展があった。拙稿「金城朝永と琉球学の構想」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第48号, 2015年, 255~80ページ)。
- 22) 与那原恵, 前掲書, 2013年, 194~5ページ。啓明会は実業家の赤星鉄馬(1883-1951)によって1918(大正7)年に設立された財団法人である。主な活動は研究助成や出版助成であった。設立から半世紀にわたる研究補助事業の総数は278件にのぼり、出版助成による刊行物は116件にのぼっている。毎年、3~5万円の研究助成をしていたが、1918(大正7)年の文部省の科学研究奨励費は年間約14万5千円、帝国学士院が5~6千円などであったので、当時の国内の全研究助成費の約5分の1を占めていたことになる。
- 23) 「けふ(今日)から展覧 珍しい南国芸術」(『東京朝日新聞』, 大正14年9月5日付)。
- 24) 与那原恵, 前掲書, 2013年, 206~7ページ。
- 25) 拙稿「伊波普猷と「沖縄学」の形成—個性と同化をめぐる—」(『京都産業大学論集人文科学系列』, 第42号, 2010年, 21~5ページ)。
- 26) 拙稿「明治・大正期における百貨店の形成—高島屋と三越の展開を中心に」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』, 第16号, 2011年, 374~434ページ); 神野由紀『百貨店で「趣味」を買う—大衆消費文化の近代』, 吉川弘文館, 2015年。日本の百貨店は、現在でも基本的には同じ経営方針であるといえる。大西洋『三越伊勢丹ブランド力の神髄—創造と破壊はすべて「現場」から始まる』, PHP新書, 2015年。
- 27) この経営戦略に拍車をかけたのは、1923(大正12)年の関東大震災後の復興であった。
- 28) 日本青年館の運営については、拙稿「田澤義鋪の青年教育と団体運動—実践的人間形成と自治生活」(『報徳学』, 第10号, 2013年, 91~114ページ)。
- 29) 吉見俊哉『声の資本主義—電話・ラジオ・蓄音機の社会史』, 河出文庫, 2012年。
- 30) 柳宗悦「外村吉之介宛書簡」(『全集』第21巻中, 159ページ)。
- 31) 水尾比呂志「解説 美の浄土沖縄と柳宗悦」(『全集』第15巻, 621~38ページ)。
- 32) 山口泉「回想の人・柳先生—民芸運動と私」(『民藝』, 第149号, 1965年, 50ページ); 柳宗悦「沖縄の思ひ出」(『全集』第15巻, 421~30ページ)。
- 33) シーサーと民芸との関連については、國吉房次「沖縄の漆喰シーサーについての一考察—「モダニズム」と「民芸」の止揚の試み」(『美術教育研究』, 第7号, 2001年, 1~21ページ)。現在、日本民藝館に所蔵されている沖縄関係の民芸品の大半は、この1回目の訪問時の蒐集品である。
- 34) 柳宗悦「四十年の回想」(柳宗悦『民藝四十年』, 岩波文庫, 1984年, 351ページ)。
- 35) 戸邊秀明「民芸運動の沖縄—「方言論争」再考に向けてのノート」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』, 第4分冊48号, 2002年, 34ページ)。
- 36) 「琉球の民芸を語る座談会」(『月刊琉球』, 第20号, 1939年, 28ページ)。
- 37) 柳宗悦「なぜ琉球に同人一同で出かけるのか」(『全集』第15巻, 24~5ページ)。
- 38) 辛那貝「柳宗悦の民芸運動における生活と芸術—近代批判と近代芸術体系の関係」(『美学』, 第53巻3号, 2002年, 28~40ページ)。
- 39) 柳宗悦「河井寛次郎宛書簡」(『全集』第22巻下, 106~7ページ)。
- 40) 濱田庄司, 前掲書, 2000年, 228ページ。
- 41) 戸邊秀明, 前掲論文, 2002年, 35ページ。
- 42) 渡名喜明「柳宗悦の沖縄文化論」(『沖縄県立博物館紀要』, 創刊号, 1975年, 26ページ)。
- 43) 比嘉春潮「農民の衣料」(比嘉春潮『比嘉春潮全集』第2巻, 沖縄タイムス社, 1971年, 112~8ページ)。
- 44) 柳宗悦「民藝学と民俗学」(『全集』第9巻, 272~4ページ)。
- 45) 島袋源一郎「郷土博物館」(『民藝』, 第1巻8号, 1939年, 37ページ)。
- 46) 水尾比呂志「解説 美の浄土沖縄と柳宗悦」(『全集』第15巻, 630ページ)。
- 47) この一行には、民藝協会同人として棟方志功(1903-1975, 版画家)、写真関係として土門拳(1909-1990, 以下は土門)、その他として保田與重郎(1910-1981, 評論家)が入っていた。この時、土門

によって撮影された写真は、柳宗悦「首里と那覇（挿絵小注）」（『全集』第15巻、265～334ページ）に掲載されている。

- 48) 鈴木訓治「琉球観光記」（『民藝』、第2巻3号、1940年）。鈴木訓治は工芸品販売関係として参加した「たくみ工芸店代表」である。
- 49) 水澤澄夫「沖縄の風物と観光」（『民藝』、第2巻3号、1940年、54ページ）。
- 50) 福田アジオ『民俗学者柳田国男』、御茶の水書房、2000年、10～2ページ；松井健『柳宗悦と民藝の現在』、吉川弘文館、2005年、204ページ。
- 51) 農山漁村経済更生運動による影響であった。拙稿「農村経済更生と石黒忠篤一報徳思想との関連をめぐって」（『京都産業大学論集社会科学系列』、第22号、2005年、111～27ページ）。
- 52) 「民藝雑記」（『民藝』、第2巻4号、1940年、53ページ）。
- 53) 柳宗悦「琉球の富」（『全集』第15巻、50～84ページ）。
- 54) 坂元昌樹「柳宗悦と保田與重郎一〈民芸〉・〈民衆〉・〈沖縄〉」（『近代文学研究』、第16号、1998年、64～6ページ）。
- 55) 柳宗悦「琉球の富」（『全集』第15巻、48～9ページ）。
- 56) 柳宗悦「琉球での仕事」（『全集』第15巻、140～1ページ）。
- 57) 沖縄の歴史の様相は、個性と同化の相剋であるとする見方もできる。拙稿、前掲論文、『京都産業大学論集人文科学系列』、第42号、2010年、1～34ページ。
- 58) 西原文雄『沖縄近代経済史の方法』、ひるぎ社、1991年、297～320ページ。
- 59) 外村吉之介「日本民藝協会同人琉球日記」（『民藝』、第1巻2号、1939年）。
- 60) 柳宗悦「国語問題に関し沖縄県学務部に答ふるの書」（『全集』第15巻、148～54ページ）。
- 61) 柳宗悦「沖縄問題に関する所信一杉山平助氏に答ふ」（『全集』第15巻、168～75ページ）。
- 62) 柳宗悦「敢て学務部の責任を問ふ」（『全集』第15巻、186～90ページ）。
- 63) 大城立裕「柳宗悦らによる沖縄言語論争」（『全集』第15巻、月報第7号、1981年、5ページ）。
- 64) 熊倉功夫『季刊叢書 日本文化10 民芸の発見』、角川書店、1978年、133ページ。
- 65) 大城立裕「柳宗悦らによる沖縄言語論争」（『全集』第15巻、月報第7号、5ページ）。
- 66) 屋嘉比取『〈近代沖縄〉の知識人一島袋全発の軌跡』、吉川弘文館、2010年、147～56ページ。
- 67) 那覇市企画部市史編集室編『那覇市史 資料篇』第2巻中の3、那覇市企画部市史編集室、1970年、357～64ページ。
- 68) 柳宗悦「琉球の富」（『全集』第15巻、58～61ページ）。
- 69) 1990年代以前の柳に関する研究では、柳の姿勢は皇民化政策を展開する政治権力への抵抗ととらえてきた。しかし1990年以降の研究では、柳の発言は沖縄を日本に取り込む性格をもつもの、あるいは柳が沖縄県民の置かれた社会状況に対して現実的な配慮を払っていなかったことを強調して、柳の姿勢を批判的にみる傾向が強い。中見真理、前掲書、2003年、346ページ。
- 70) 柳宗悦「国語問題に関し沖縄県学務部に答ふるの書」（『全集』第15巻、150～4ページ）。
- 71) 拙稿、前掲論文、『京都産業大学論集人文科学系列』、第42号、2010年、22～5ページ。
- 72) 伊波普猷『沖縄歴史物語—日本の縮図』、平凡社ライブラリー、1998年、173ページ。
- 73) 伊波普猷「琉球語便覧」（伊波普猷『伊波普猷全集』第8巻、平凡社、1975年、260ページ）。
- 74) 拙稿「比嘉春潮と沖縄研究の展開—インフォーマントとしての役割」（『京都産業大学論集人文科学系列』、第46号、2013年、82～4ページ）；拙稿、前掲論文、『京都産業大学論集人文科学系列』、第47号、2014年、243～53ページ。
- 75) 外間守善「沖縄における言語教育の歴史」（大野晋・丸谷才一編『日本語の世界 9 沖縄の言葉』、中央公論社、1981年）。
- 76) 太田朝敷『沖縄県政五十年』、おきなわ社、1932年、82～91ページ）。太田朝敷については、拙稿「太田朝敷の地域発展論—沖縄の「独立自尊」をめぐって」（『京都産業大学論集人文科学系列』、第40号、2009年、135～74ページ）。
- 77) 比嘉春潮「年月とともに」（『比嘉春潮全集』第4巻、沖縄タイムス社、1971年、191～2ページ）。
- 78) 拙稿、前掲論文、『京都産業大学論集人文科学系列』、第46号、2013年、91～3ページ。
- 79) 中見真理『柳宗悦—「複合の美」の思想』、岩波新書、2013年、145ページ。

- 80) ヌタヤウタキについては、拙稿、前掲論文、『京都産業大学論集人文科学系列』、第47号、2014年、246～9ページ。
- 81) 柳宗悦「琉球文化の再認識—沖縄県知事に呈するの書」(『全集』第15巻、176～85ページ)。
- 82) 柳宗悦「柳宗悦手記」(『全集』第15巻、596ページ)。
- 83) 柳宗悦「美の浄土」(柳宗悦『柳宗悦コレクション3こころ』、ちくま学芸文庫、2011年、167～212ページ)。
- 84) 松井健、前掲書、2005年、142～53ページ；拙稿、前掲論文、『京都産業大学日本文化研究所紀要』、第20号、2015年、139～40ページ。
- 85) 柳宗悦「民藝と雪舟」(柳宗悦『柳宗悦コレクション2もの』、ちくま学芸文庫、2011年、177～88ページ)。
- 86) 柳は美の目標として、渋さの美・平常性・健康性・単純性・国民性・地方性をあげている。柳宗悦『工藝文化』、岩波文庫、1985年、156～75ページ。
- 87) 中見真理、前掲書、2003年、19～33ページ。
- 88) 琉球新報社編『東恩納寛惇全集8』、第一書房、1980年、174～7ページ。
- 89) 拙稿、前掲論文、『京都産業大学論集人文科学系列』、第42号、2010年、11～6ページ。
- 90) 柳宗悦「琉球学の第一歩」(『全集』第15巻、191～3ページ)。
- 91) 中見真理、前掲書、2013年、149ページ。もっとも、批判そのものが、この時代において、どのように可能であったかを問うことも必要である。松井健『民藝の擁護—基点としての〈柳宗悦〉』、里文出版、2014年、119～21ページ。
- 92) 柳宗悦「沖縄の話」(『全集』第15巻、414～8ページ)。
- 93) 太田好信「文化の流用 (Appropriation)、あるいは発生のお話へむけて—柳宗悦と論争の〈場〉としての言語」(『北海道東海大学紀要 人文社会科学系』、第5号、1992年、77～96ページ)。
- 94) 柳宗悦「金閨丈夫宛書簡」(『全集』第21巻中、200～1ページ)。
- 95) 渡名喜明「柳宗悦の沖縄文化論」(『沖縄県立博物館紀要』、創刊号、1975年、26～7ページ)；松井健、前掲書、2005年、96～8ページ。
- 96) 柳宗悦「改めて民藝について」(柳宗悦、前掲書、1984年、334～5ページ)。
- 97) 木田拓也『工藝とナショナルリズムの近代—「日本的なもの」の創出』、吉川弘文館、2014年、83～5ページ。明治後期には、この工藝の動向は「京都」において現れる。拙稿「明治期京都の工藝の展開—試験研究と工業化をめぐって」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』、第12・13合併号、2008年、385～93ページ)。
- 98) 柳宗悦、前掲書、1985年、172～5ページ。
- 99) 柳宗悦『工藝の道』、講談社学術文庫、2005年、32～57ページ。
- 100) 中見真理、前掲書、2013年、165～7ページ。

Muneyoshi Yanagi and Okinawan Culture

—Folk Handicraft Campaign in the Rimland—

Nobuhisa NAMIMATSU

Abstract

Muneyoshi Yanagi worked on the *Mingei* folk handicraft movement with Kanjiro Kawai and Shoji Hamada. Yanagi had a strong interest in the culture of Okinawa, Ainu, and Taiwan. His interest was unusual in pre-war Japan, since these areas were positioned as the periphery of the Japanese Empire, and were disregarded as backward. However, Yanagi focused on the diversity of the peripheral cultures, and thought that they were important for the Japan's future.

Preceding studies on Okinawan culture and Yanagi have not made it clear what kind of influence his interest in Okinawa had on the *Mingei* movement, nor the Okinawan reception of the *Mingei* movement. This article reveals the transformation process of the *Mingei* movement in the context of the wartime regime's centralization and standardization, and shows how it was ineffective in promoting regional revitalization in Okinawa.

There were two basic reasons for this. Firstly, Yanagi made much of the cultural originality of Okinawa, but he did not make it clear what this originality came from. This was because Yanagi did not give enough importance to the history of Okinawa. Secondly, Yanagi's concept of "people" or *minshu* was an ideal concept that did not correspond to reality, and it was problematic for him to apply it to existing people in Okinawa, without distinguishing commoners from the upper classes.

Keywords: Muneyoshi Yanagi, Okinawa, Folk Handicraft, Periphery, Originality